

音 韻 (理論・現代)

日本における音声の研究は、主として二つの領域に分かれて行われてきた。一つは、音声を人間の知覚認知または発話行為の問題として捉えようとする立場の人たちによるものであり、今一つは、音声を機械装置の入力、出力媒体として捉えようとする、あるいはその方法論に準じて研究を進めようとする人々によるものである。

国語学、言語学、音声学、方言研究の世界では、ほとんどの研究は前者の立場によったものであり、情報工学、情報処理研究を中心とする人々の研究は、後者の立場に立つものであった。対象とする音声も前者は自然言語がすべてであるのに対して、後者では人工言語が中心となっている。人的な交流もこの二つの領域にまたがることは極めて稀であった。

その原因には、冒頭に述べたように、解明し到達しようとする目的が、また研究の方法論が、異なることにもよるが、後者の工学的研究の歴史が浅く、たとえば自然言語研究への挑戦を可能とする段階に至っていなかったことが、一つの要因であったと思われる。

しかし、過去十年ほどの間の情報工学的的手法による研究は、量的にも、また質的にも著しい成果をあげてきており、昭和五十三年、五十四年の研究成果の流れを見ると、前者の立場からは、後者の

水 谷 修

方法論から学ぶことの可能性が、また後者に対しては、前者の研究目的領域への積極的参加が、実現してもよい情況に到達したものと判断される。

日本音響学会は、後者の立場を代表する研究団体であるが、昭和四十六年以来久しぶりに広く音声研究一般に関する特集を行った。『日本音響学会誌』34-3、(昭53・3)。その中の「音声研究の現在と将来」と題する展望記事の中で、藤崎博也氏は「……このように考えると、人間の通信形式としての音声言語の十分な理解とその利用は、音響学あるいは通信工学といった既存の一学問分野の観点・手法にとらわれることなく、上に述べた多くの学問分野の観点を総合した学際的な視野に立ち、それらの手法を縦横に駆使することによってはじめて達成し得るものであることが理解されよう」と述べている。言語学あるいは国語学の立場にある研究者が、いかなる姿勢をもってこの推移に対応していくかは、大きな課題だと言わなければならない。

一 単音あるいは単音節の単位で取り上げた論述・研究

「国語音楽論における『異音』」福島邦道『実践国文学』14、昭

53・10)、「日本語の閉鎖音の延長・短縮による促音・非促音としての聴取」福井誠二(『音声学会会報』159、昭53・12)、「日本語東京方言の音節ニ/ɛ/、ヌ/ɔ/における鼻子音/ɱ/の調音について」岡田秀穂(『早稲田大学語学教育研究所紀要』18、昭54・3)、「現代日本語の長母音について——その音韻的解釈」三根谷徹(『国学院大学国語研究』42、昭54・3)、「母音と子音」佐伯功介(『月刊ことは』3—6、昭54・6)が分節的な音のひとつひとつの問題にかかわるものとして目についた。

本邦の音韻の研究書には「異音」という用語がほとんど見られない現状に対して、言語研究上必要があるという福島氏の「異音」論は、説得力を持った論述である。日本人に対して日本語の音韻を説明するには、「異音」の必要性の可否が論じられる可能性はあるにしても、外国人に対しての説明では、異音の段階にまで基準を深めなければ効果のないことは明白な事実である。

福井氏の「促音」に関する研究報告は、促音と非促音の長さに段階的に変化をつけ、聴取反応を調査したものである。非促音は、その長さを二倍まで延長すると完全に促音として聴取される、また、促音+母音の長さは非促音+母音の長さの二倍になることはない、などの知見が得られている。

東京方言の「ニ」「ヌ」の調音についての報告は、予備調査の結果であるが、まじめな資料収集の姿勢とまじめな方には好感が持てる良いレポートである。

三根谷氏の「現代日本語の長母音について」は、この問題に関する諸説を紹介、検討を加え、「現代日本語の長母音は/aɪ/, /i:/, /u:/, /e:/, /oo/と二モーラをなすものと解釈さ

れ、同じ音素連続が、それぞれ/aɪ/と/aɪə/、/i:/と/i:i/、/u:/と/u:u/、/e:/と/e:e/、/oo/と/o:oo/のように分けられるのは音韻論のレベルではなくて、形態論のレベルにおいてである」と結論づけておられる。

三根谷氏も文字表記との関係を提起しておられるが、佐伯氏の「母音と子音」の論述も文字と音との関係から説きおこし、声、破裂音、摩擦音と母音・子音の対立関係に至り、やがて「日本語では『声』は全体的、ムード的、『舌』は分析的、理知的の傾向が見えやしないだろうか?」という楽しい提案になる。

日本語の母音については二、三の見逃がせない報告がある。一つは国立国語研究所報告「X線映画資料による母音の発音の研究」上村幸雄・高田正治(秀英出版、昭53・3)で、題名どおりX線映画資料をもとにした研究であるが、報告書の内容は、第一章―序章、第二章―母音の調音の生理学的基礎、第三章―声道による母音の調音の可能性、第四章―日本語の五母音という構成になっている。新しい知見がいくつか含まれているが、誇張した発音による場合と標準的な場合とは、下あごの開きが二倍あるいは三倍になるなどの事実は、映像による客観的な観察によってはじめて可能になったものと言えよう。「千葉勉・梶山正登両氏に拠って先鞭をつけられたX線に拠る研究が本書で見事に花開こうとしている」という大友信一氏の紹介(『国語学』119、昭54・12)がある。

今一つは、小泉保「日本語の母音の特性」(言語)7—10、昭53・10)である。10ページほどの短い、啓蒙的な小論だが、きれいにまとまっていて、入門者への教材に是非使ってみたいと思わせる良い

二 連音・連音節の単位でとりあげた論述・研究

この範疇では、「日本語母音、子音調音の隣接音の影響による変動」桐谷滋『日本音響学会会誌』34—3、昭53・3）、桑原尚夫「連続音声の知覚と認識」〔NHK技研月報〕21—3、昭53・3）、「連続音声中の母音知覚と特徴抽出の一試み」〔NHK放送科学基礎研究所報告〕54・5）、“Consonantal Influence on /a/ in CVC,” Yukihiko NISHINUMA〔音声学会会報〕60、昭54・4）、“Temporal Organization of Segment Features in Japanese Disyllables,” Hiroya FUJISAKI & Norio HIGUCHI, Ann. Bul. RILP, No. 13, 1979, “Compounding and Voicing in Japanese,” Ken HINOMIZU, Sophia Linguistica, 1979 等々あり、それぞれ立場から音節構造と音のかかりあいに関心をあてて追究している。発表要旨ではあるが、今泉喜一氏の「r-voiced変音」〔日本語教育〕39、昭54・10）は、いわゆる縮約形の変音ルールを取り扱ったものであり、また、実態調査として、「ガ行鼻濁音について——現代若年層の発音の実態」安栄京子氏「玉藻」15、昭54・6）の横浜地区の中学生を中心にしたガ行鼻音の調査結果報告がある。

「固有名詞の連濁・連清の系譜」中川芳雄『静岡女子大学国文研究』12、昭54・3）は、固有名詞の連濁・連清論は普通名詞の場合と同じように扱ってはいけないという論旨で書かれたもので、豊富な資料を用いて類型分類が試みられている。

三 生成音韻論の伸長とフィーバー論争

Chomsky-Halle “The Sound Pattern of English” 1968 が刊行されて十年余になるが、日本における生成音韻論の研究も一つの峠にさしかかっているようである。

生成音韻論そのものを紹介する単行本も出版され、清水克正「生成音韻論概説」篠崎書林（昭53・6）、根間弘海「初歩生成音韻論」中部日本教育文化会（昭53・8）、根間弘海「生成音韻論接近法」見学出版（54・1）はいずれも概説書であるが、「生成音韻論接近法」では、基底表示の設定や、規則手順などを説明するのに日本語の資料を使用し、宮古方言にも論究の対象としてかなりのスペースを割いている。方言記述のような具体的な言語の取り扱いの段階に至った生成音韻論が、いくつもの論争をひきおこしたというのは、一つの特記すべきことがであろう。

五十四年の「言語」5月号に掲載された小泉保氏の「フィーバー」は日本語？と題した論文は、（最近「フィーヴァー」feverという語が流行している。日本語の音楽としてこれをどのようにとらえたらよいか）という設問を前提として書かれたもので、「音楽/音の身分決定はまだコンセンサスを得ていない。個人によりかなりのばらつきがある」……現在では外来語にのみ用いられている。……やがてこれら新来の音楽は既成の日本語の音韻体系を突き崩し、大きく変貌させていくことであろう」という事実認識に基づいたものであった。

それに対して「言語」7月号の読者のページ（言語空間）で中井悟氏が、「小泉氏の『新しい音楽』が確立されつつある」という主張は、構造言語学的には正しいかもしれないが、生成音韻論的立場では、新しい音楽が確立されたのではなく、新しい任意規則を持つ

人が多くなってきたものとすべきだ」と指摘したことは、「言語」8月号へ読者のページV「フィーバーの反響」小泉保、10月号へ読者のページV「フィーバーの『フィ』をめぐる」根間弘海、「再び『フィーバー』について」中井悟の反論・再論を呼びおこした。根本的な問題としては、生成音韻論が基底として設定する形式とその心理的実在、あるいは言語意識との関係をどう考えるかという点にしばられていくようだが、この議論の直接の論点の一つは、〔Φ〕音のもつ円唇性を余剰的特徴にすぎないと見るか、あるいは余剰的なものではないと見るかにあるが、生成音韻論の立場に立つ根間氏が「余剰的特徴と見做して差支えない」と判断し、「同じ生成音韻論の立場でも（中井氏とは）異なる解釈をすることは可能である」との意見を提出されたことに興味をひかれた。

四 アクセントを対象とする論述・研究

アクセント研究の領域でも生成音韻論は論議の焦点となった。象徴的な例は、「言語の科学7」（昭54・3）に載せられた二つの論文、原口庄輔「日本語音調の諸相」と、服部四郎「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」の場合であろう。

原口氏の研究は、生成音韻論を土台とした自律分節理論（オートセグメンタル・セオリー）と呼ぶもので、この論文は、氏の過去数年にわたる日本語の方言の音調に関する自律分節分析の実績の延長上に位置するものであった。はじめにこの論の展開に必要なと考えられるオートセグメンタル・セオリーの基本的な考え方の紹介があり、以下、その枠組に基づいて、東京方言、弘前方言、栗石方言、中村方言、久見方言、鶴岡方言、奈良田方言の音調現象の分析を行って

いる。分析の結果は、「音調に関する一般理論では、(i)アクセント移動規則を認める必要があること、(ii)アクセント移動規則や音調交替規則には、音節の数に依存しているものや音韻上の情報によって影響を受けるものがあること……」など、五項目以上の理論上重要な結論が得られたとし、オートセグメンタル理論に基づく分析は新しい知見を得るにとどまらず、「われわれに夢と発見の喜びを与えてくれる稔り多い理論であると言ってよいことになるであろう」と結んでいる。

服部氏の論文は、同時掲載ではあるが、論中に記された如く、「本誌月号所載の論文において原口庄輔氏の採用している、"Autosegmental Theory"の手法には全然賛成することができない」という前提に基づいて書かれたものであり、日本語の諸方言等に見られる種々のアクセント体系について、アクセント素からアクセント音調型を生成する氏の手法を示そうとしたものである。序説においては、ここに言う「表層アクセント素」とは従来「アクセント素」と呼んできたものことであること、「基底アクセント素」とは従来「形態アクセント素」と呼んだものと密接な関係があることなどの断りがきがあり、本文では、東京方言、弘前方言、栗石方言、中村方言、久見方言、鶴岡方言、奈良田方言のアクセント体系を扱い、京都方言のアクセント体系、アクセント音調型の生成規則について、アクセント核の本質について、「昇り核」/r/についてなどの章が付加されているが、原田論文の提出順序と全く同じになっている。

原口論文に対する反論は、「われわれの有する言語的 intuition に反するばかりでなく、甚だ煩瑣である」として、東京方言アクセント

の扱いの例をあげることからはじまっており、「論全体が Autosegmental Theory に対する批判になっている」と言われている。アクセント音調型の生成規則についての項で、氏は「上の諸規則を作成するに当っては、常に発話活動を考慮に入れた。……アクセント素の頭からはじめて末尾の方に及ぶようにしたのはその一例である」と述べておられる。原口氏の手順にはたしかにそのような配慮はないが、これはオートセグメンタル・セオリーそのものの持っている弱点と結びつくものであろうか。

アクセント研究の今一つの拠りどころは、情報工学的手法によるものである。この領域で研究の実績を積み重ねているのは杉藤美代子氏である。「単語アクセントの発話と知覚における個人差および方言差の定量的研究」杉藤美代子『言語研究』74、昭53・10)は氏の最近の研究の代表的なものであろう。

この研究のねらいは、「……アクセントの発話面での分類や地域的な分布等に関しては、従来数多くの研究がなされてきたが、それらの方言話者のアクセントの知覚能力に関する定量的な検討が行われることは稀であった。しかし、これらアクセントを異にする方言話者のアクセントの知覚がどのようなものであるか、これを比較し検討することは、方言アクセントの変化の過程を知る上からも重要であり、さらに言語の発話と知覚の関係を検討する上からも興味ある材料と思われる」と前文に記されたところからも明らかのように、アクセントの記述的研究ではない。「アクセント型の聞こえのゆれと発音のゆれ」(『大阪樟蔭女子大学論集』11、昭48・11)以来の合成音声による知覚実験を主体としたもので、各実験地での発話

の実態にも照らしあわせて検討したものである。

実験地点は大阪、東京、岡山、福井、米沢、長崎の六か所で、被験者は各一高校一クラス全員で、大阪では大学生(音楽大学生も含む)にも実施し、音感という観点からアクセント教育の可能性について確かめている。

得られた知見としては、「アクセント型の判断境界および識別能力には個人差があること、また、方言差に関しては、日本の主な方言である京阪アクセントおよび東京アクセントの話者の識別能力には著明な差はないが、型の発話の不安定な二型アクセントの話者、さらに音韻論的な型別を持たない無型アクセントの話者の識別能力は格段に劣ることが明らかになった」とことや、発話と知覚の相関の大きいことなどが報告されている。

応用科学的研究の土壌を持たない日本の人文系研究の中では、教育や習得の効率などに結びついた研究はなかなか育ちにくい、規範論に陥ちこんだりしない、しっかりした科学的な方法論に支えられた研究が、アクセントに限らず日本語研究全体の中にもっと広がっても良いはずである。氏の研究はその意味でも高い評価が与えられるべきである。

杉藤氏の報告には、ほかに「近畿アクセントの発話における喉頭制御について」(『樟蔭国文学』16、昭53・9)、「近畿方言2拍単語アクセント型の分析および知覚」藤崎博也・杉藤美代子『日本音響学会誌』34—3、昭53・3)など数篇がある。

アクセントの個人差や方言差にかかわる研究については、「移住者二世の言語——特に無アクセント地域の場合」平山輝男(『国語学』114、53・9)、「アクセントの個人差をめぐる研究概観——アクセント変化

との関連において」上野善道(『言語生活』320、昭53・5)がある。

生成音韻論の立場からのアクセントへの論究には、「日本語のピッチアクセント——その一般的特性」根間弘海(『金城学院大学論集』74、昭53・3)、「京都語と音調同化(英文)」本間弥生(『音声学會会報』158、昭53・7)などがある。

五 リズム・イントネーションをめぐって

リズム(韻律)ということばを題目の中に盛りこんだ論文としては、次のようなものを目にした。「等時音律説試論 定型詩歌はど
う読むべきか」寺杣雅人(『文学』46-2、昭53・2)、「韻律論の
基本寺杣論文をめぐって」坂野信彦(『文学』46-7、昭53・7)、「
なぜ五音・七音が音数律の謎を解く」坂野信彦(『月刊ことば』2
-10、昭53・10)、「日本のわらべうたのリズム」金田一春彦(『言
語』8-12、昭54・12)

はじめの寺杣論文および坂野論文は、定型詩のよみ方のリズムに
関する論で、寺杣論文が音歩説批判を中心に現行の音律論を批判し
たのに対して、坂野論文は、寺杣の理論が規範的研究にとどまり、
科学的段階に至っていないという立場で反論したものである。

「なぜ五音・七音か」は、日本の韻文が二音を一拍とすることに
よって拍子を生み出すという事情と、律文定型が五音・七音である
こととの関係を、休止音の介入という機能をもって説明したもので、
「日本のわらべうたのリズム」は、二拍子の成立に裏間、表間と呼
ぶ原則が関与していることを基本に多くのわらべうたの実例を整
理、分類し、分析を加えたものである。

単行本としては桜井茂治『日本語の旋律』(双文社、昭53・5)

があり、一、ことばの旋律を考える、二、日本語の旋律を求めて、
三、日本語の旋律と文学の三つの章から構成されている。二章の
中では、日本語の音節構造と旋律、アクセントの変化と旋律、話調
と旋律など、言語の形式の旋律以外の要素との関係について触れ
ている。

イントネーションあるいはプロミネンスを標榜した論文、論述は
きわめて数が少い。「イントネーション・ユニバーサルの問題」安
倍男(『音声学會会報』157、昭53・4)は、氏が従前より主張され
ているイントネーションの世界性という概念の内容を再確認する意
味で記述されたものである。具体例としてはスワヒリ語が取りあげ
られている。

同氏による「欧米におけるイントネーション研究の動向」(『音声
学会会報』158、昭53・7)は、英語のイントネーションの問題に限
られてはいるが、イギリスおよびアメリカを中心とした研究動向に
ついての情報を提供している。短い読物ではあるが、未知の情報が
誰にでも一つは得られよう。音声学會会報には、大西雅雄氏の「理
論音声学講座Ⅰ、イントネーションの本質と定義」、2、プロミネ
ンスの本質と定義」(157、158、昭53・4、7)、北原雄一氏の「言語音
楽の提唱」など、アクセントの単位をこえる音声事象に関する論述
が載せられているが、他の関係誌には(リズムを除き)全く見られ
ないのは、一体なぜであろうか。

東京大学音声医学研究施設の沢島政行氏を中心とする研究組織で
は、日本語のプロソディーを研究目標の一つとして打ち出してお
り、施設の年報(RILD)13、昭54)には、上野田鶴子氏ほかによ

10 „On pitch Contour of Declarative, Complex Sentences in Japanese”の報告が現われている。人工音声によるテープを聞かせ、文の音の高低関係の知覚を調べようとしたものであるが、今後の成果が期待される。

六 音韻・音声の実態に関する調査研究と教育

日本語の音素やアクセントについて、その体系性や特徴について検討すること、あるいはある音声人間がいかに知覚するかを追究することは、重要な研究課題ではあるが、日本の社会において、人々がいかなる音声を現実で使用しているか、あるいはいかなる意識をもって音声に対処しているかを知ること、忘れてはならないことである。

この分野の調査研究で、五十四年度にNHKの総合文化研究所・放送世論調査の果たした役割は大きい。まず、NHK放送文化研究年報24、54年7月に掲載された菅野謙、田田弘両氏による「放送での『発音のゆれ』45年」がある。第一部では大正15年の放送開始以来の45年を五つの時期に分け、放送での「発音のゆれ」の流れを追っている。ある時期には「ゆれ」を統一しようという方向にむかい、また、ある時期には許容の幅を広げる方向を示しているなど、その当時の社会情勢をも反映して、興味ある事実を示してくれる。また、個々の具体例の中では、たとえば「日本晴れ」の発音は、放送で使う発音として戦時中は「ニッポン晴れ」、戦後は「ニホン晴れ」、現在は「ニッポン晴れ」と「ニホン晴れ」が併存しているという記述など、実に興味深い。

戦中版、戦後版、現行版の三つのアクセント辞典の比較でも、26

年の戦後版で「発音のゆれ」の項目数が少くなっているのは、同書の編集時期に放送の役割の一つとして標準語の普及が重要視され、発音・アクセントの整理統一が必要であるという考え方が強かったからという考察もある。引用されている資料の中には、「昭和初期に引用できた国語辞典での発音のゆれの一覧表」、「放送用語並発音改善調査委員会一年間の審議内容」、「現行版アクセント辞典」刊行後の「発音のゆれ」の検討項目表など、利用価値の高いものが多く含まれている。第二部は、発音のゆれをことばのグループ別に分類し、主なものについて個々のグループの時期的な流れをも加えて説明したものである。とりあげられた項目には、地名人名などの固有名詞、地名人名に準ずる固有名詞、専門用語、外来語、外国地人名、普通名詞—促音化、促音添加などがある。

「漢音、呉音、慣用音の発音のゆれ(1)」菅野謙(『文研月報』29—10、昭54・10)「同(2)」『文研月報』29—11、昭54・11)は、放送が使う漢語の「発音のゆれ」の問題点を調べるために、現代の日本語で使われている漢音、呉音、漢用音の実態を新聞資料に限定して概観したもの(1)と、放送での「発音のゆれ」の問題点を調査したものの(2)で成り立っている。筆者は論文の末尾において、漢音、呉音、慣用音の「発音のゆれ」の将来方向についても推論をすすめているが、何よりも豊富な資料に裏打ちされた記述は利用価値が高い。

「タナツカクエー」と「タナカカクエー」放送ニュースの促音化傾向」田田弘(『文研月報』29—2、昭54・2)は、アナウンサーがニュースを読む場合の促音化の実態を調べたものである。結果の考察のあと、論は社会一般における促音化についてもふれているが、この現象は意識外で行われているのが普通であるから、「それ

について反省することがなければ、どんどん進んで行ってしまいうかもしれない」と文を閉じている。

NHK総合放送文化研究所、NHK放送世論調査所は五十四年九月八日、九日に、十六歳以上の男女三千六百人を対象に「ことばに関する意識調査」を実施した。調査は個人面接法で行われ、質問の一部に録音テープ再生の方式が用いられ、音声に関する質問が三つ含まれていた。一つはニュースを読んでいる速さについての反応、次は若い人たちに特徴的な「だからアー、それはそれなりにイー……けどォー……はアー」といったイントネーションに関する反応、そして最後は、ガ行鼻音に関し、鼻音と非鼻音の二つの例を聞かせ、どちらが感じが良いかをたずねるものであった。

「ことばに関する意識調査——結果の概要」（昭54・11）によれば、ニュースの速度については「ちようどよい」が64.5%、「やや速い」が31.8%となっており、若者特有のイントネーションについては「多少気になる」が50.8%、「あまり気にならない」が35.1%、「非常に気になる」9.7%、「全く気にならない」2.9%となっている。ただし、その内訳を年齢別に見てみると、「気になる」が10代と20代では、40と50%、40代と50代で70%となり、男女別では、10代20代後半で著しい男女差が見られ、男性は30と40%が気になり、女性は過半数が気になるといふ結果が出ている。

ガ行鼻音については、「よいとするもの」46%、「鼻音でない方がよいとするもの」37%であった。出身地によりガ行鼻音に対する好みに相当の開きのあることもわかり、音声に関する調査としてはもう少し突っこんだ内容でと欲も出るが、とにかく一つのデータが得られたということと、調査の実施内容に取りあげたという点では、

評価すべきであろう。

音声に対する人間の能力ないし関心を調べたものに、規模は小さいが面白い報告がある。「子ども音声学者——調音動の意識化」大浜幾久子（『言語生活』325、54・1）は、5歳から12歳までの幼稚園児、小学生が、調音のときの感覚運動のうちどの部分を意識化できるかを調べたものである。結果の考察では、母音の調音は子音より意識化が容易である、舌の違いを正しく意識化することは非常に困難であるなど、いくつかの示唆が出されている。

結果の良し悪しは別として、発音の指導・訓練そのものは何らかの方法で行われているとしても、それを受け入れる学習者の能力、レディネスについては、余り関心が持たれていない。音声の重要性を自ら認める者は、音声に対する社会の無関心を嘆く前に、音声についての関心を広め得る条件を一つずつ明確にしていく必要があるようである。同じ意味で、音声の習得・教育のカリキュラムの開発に関する研究もあってよいし、教材の作成もさかに行われるべきであろう。五十三、四年度に刊行された日本語の音声に関するテキストとしては、『日本語音声学』天沼寧、大坪一夫、水谷修（くろしお出版、昭54・7）がある。

七 日本語の音声の研究に近づく二つの領域

一つの領域は比較対照的研究によるものである。学会報、紀要をはじめとして語学専門誌、各国語に関する文献の中では、日本語の音声を対象としたものなど、かなりの数にのぼる。当該の外国語の音声についてはともかくも、日本語の音声については決して程度が高いとは言えないものもあるが、やがてはこの領域においてもすぐれ

た考究が数多く現われるようになるにちがいない。ここにも日本語音声研究の一つの道がある。

他の一つの領域は、冒頭に藤崎博也氏の展望文で引用したように、情報工学ないしは音響学の世界から接近してくるものである。『音声認識』新美康永（共立出版、昭54・10）は、情報科学講座の一部である「認識理論および認識機械」三部作の一冊として刊行されたものであるが、その内容に含まれる自然言語への接近度の高さは驚くばかりである。その進歩の著しきは、この著書の内容だけに限られているものではない。著者があとがきで触れているように、連続する単語の認識と、電話回線を通じた話者照合、音声合成の技術を組みあわせることにより、総合的な音声情報処理システムを構成することができ、電話による、機械が音声で応待する座席予約システムが、近くわが国で実用化されるという。

機械施設そのものの進歩についてはともかく、その進歩を可能にする音声の研究が着々と進んで行くことには、敬意を覚えすにはいられない。それらの成果のなにかを受け入れる態勢、あるいは、それらの研究の進展に寄与できる、人文系研究者に課された音声研究のありかたは、一体どのようなものであろうか。

——名古屋大学総合言語センター教授——